

# やまと 民俗への招待

鹿谷 熱

2月3日の節分の日、奈良市の手向山八幡宮でオンド（御田植行事）が行われた。午前11時頃、大勢見物人が集まる拝殿辺りから、笠竹を持った白丁や翁面を付けた田主（富司）、牛童、早乙女、法被姿の氏子などが行列を作り、「西の山に青い雲のさし」でたは、かの地かやこの地かや」と詠いながら、境内外を道行きし、櫻門から再び入って拝殿に上がる。

拝殿を田に見立てて、田主が「いかに殿原」と呼びかけ、「今日た最上吉日なれば鍼初めをせばやと存候」と語る。周囲の地謡役は「めどとう

田主と周囲が掛け合いながら、農耕の模擬行為をする。「鍼初め」から始めて、牛面を頭に載せた男の子を使って唐笠で田を耕す場面、机で田をならしたり、肥使いをしたりしたあと、「種蒔き」に移る。田主は紙で作られた人形を付けた福桶を持って「福の種蒔こうよう」と「日本國時こうよう」といの目に切ったものをまぐ。



本殿と拝殿境の柱の元で、糲種などに小鼓を打つ田主  
II 筆者提供

## 苗の成長願うオンド

牛童が小さな声で「モウ」と鳴きまねをするために周囲がどよめく。神前で田植えに至る農作業を演じて、天下泰平、五穀成就、氏子繁昌と願い事を言葉げすることに、予祝としてのオンド行事の意味がある。

この田植え行事では、まず始めに水口祭りが行われる。本殿と拝殿境の左右の柱に雄松と雌松を立てる。白壁を添えた所に先の糲と大豆とキリコを供え、直径7.5cmほどの銅鍼子と小鼓を打つ。これは糲種の発芽と無事成

る。今では見られない昔ながらの農作業の様子がながらの農作業の様子が丁寧に次々と展開され、

供え、直徑7.5cmほどの銅鍼子と小鼓を打つ。これが古くからの田植えを囁く樂としての田樂の一部が今に伝わった行為だと思われる。（奈良民俗文化研究所代表）